

メラノキシロンアカシアの取り木について

上中 幸治・羽谷 啓造・那須 孝治

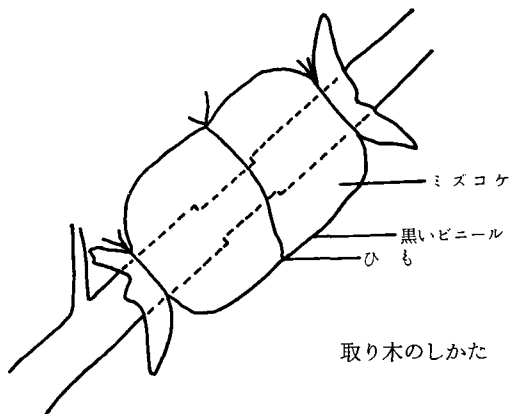
まえがき

アカシア (*Acacia*) 類は多くの根粒菌を付着させており、せき悪地における土壤改良、肥料木としての役割が期待されているが、なかでも、メラノキシロンアカシア (*A. melanoxylon*) は大径木になり、樹形も通直で、用材としての利用も期待され、最近では、マツクイムシ被害林あとへの植栽が勧められている。

しかし、これまでメラノキシロンアカシアの繁殖は実生法によっていたため、種子交換によって導入されたメラノキシロンアカシアでも樹形など形質に種々の変異がみられ、廃棄あるいは除伐しなければならない形質不良木がかなり出現した。

著者らは形質優良木の選抜を目的として、メラノキシロンアカシアの取り木を行なったところ、よい発根率を得ることができたので、その結果と作業上の問題点について報告する。

方 法



まず、取り木をするメラノキシロンアカシアの母樹の上、中層の生育旺盛な枝（直径 0.7～1.5 cm）を選び、図のように、よく切れるナイフで樹皮を長さ 1.5～2 cm に環状に剝皮し、そこを中心にミスゴケを巻き、さらに、その上を黒いビニール布で覆い、3ヶ所くらいを細いひもでしばりつけておいた。また、剝皮部を支点にして、風などで折れることを避けるため、竹などで副木をしておいた。

結 果

1974年7月12日に129ヶ所の取り木を行ない、取り木実施後108日目の10月28日に発根状態を調べたところ、結果は次のようであった。

発根 115本	{	発根して生きていたもの	105本
		発根したあと折れて枯れたもの	10本
不発根14本	{	不発根で枝が生きていたもの	9本
		(カルスを形成しつつあるものを含む)	
		9不発根で枯れていたもの	5本

発根率は89%のよい成績であったが、発根後、風で折れたものが目立った。また、不発根で生きていたものは、環状剥皮が完全でなかったことによるものようである。得られた稚苗は1976年3月、



メラノキシロンアカシアの取り木

山地に定植したが、山出し率は80%ということになる。

現在までの生育状況は下記のとおりである。

生育状況

	取り木時 12. vii. '74	山出し時 iii. '74	9. xi. '77
調査本数	129	103	76
直径 $D_{0.0}$ cm	1.06 ± 0.23	2.20 ± 0.41	4.40 ± 0.85
$D_{1.3}$ cm	—	—	2.9 ± 0.7
樹高 cm	—	159.5 ± 28.3	344.0 ± 59.0

取り木にあたっては枝は伸長旺盛なものを選び、剥皮を完全に行なうこと、取り木をする部分以外の小枝はとり除かないこと、風による折れのないように副木をすること、ミズゴケは十分に湿らせておくことなどに注意する必要がある。

参 考 文 献

- 1) 船越桂市：銀葉アカシアの取木，農耕と園芸，**6** 56～57，(1963)
- 2) 加藤岩男：アカシア類の取り木について（予報），福岡県林業試験場時報，**10**，37～39，(1963)
- 3) 植村誠次：見直したいメラノキシロン・アカシアの造林 林試場報 **135**，1～4，(1975)